

テーマセッション

ウィズ・コロナ、ポスト・コロナの
信仰のかたち

黒崎 浩行¹

佐藤 壮広²

君島 彩子³

司会 西村 明⁴

(2020年7月12日(日) Zoomにて実施)

2020年は新型コロナウイルスとともに記憶される年となるかもしれない。中国・武漢市やイタリアでの爆発的感染以降、世界的なパンデミックとなり、国内でも4月から5月にかけて緊急事態宣言が大都市圏をはじめ全国的に出されて、日常生活や仕事・学業に大きな制約が課されることになった。解除から2か月を経た7月になっても、今後の見通しが立てづらい状況が続く。それは信仰の現場においても同様である。大小さまざまな祭りや宗教行事が中止・延期の決断を余儀なくされ、礼拝や勤行といった日々の儀礼的实践も「3密」(密閉・密集・密接)を避け、「ソーシャルディスタンス」(社会的距離)を確保することが求められるなか、それぞれの宗教伝統で連綿と続けられてきた形態も否応なく変容が迫られている。今回のコロナ禍は、宗教や信仰の現状、そして今後のあり方にどのような影響を及ぼすのだろうか。

これまでフィールド調査を通して、各地の信仰の形を独自の切り口から捉えてきた3人の宗教研究者にオンラインの鼎談形式で、話をうかがった。黒崎浩行さんは東北の震災被災地や鼎談直前に豪雨災害があった熊本県人吉市などにおいて、神社祭礼をはじめとした地域の信仰実践を調査研究されるとともに、インターネットなどのメディアと宗教の関係についての研究の蓄積があり、2019年末に『神道文化の現代的役割—地域再生・メディア・災害復興』(弘文堂)を刊行された。佐藤壮広さんは、キリスト教研究を出発点に、沖縄のシャーマニズムと沖縄戦の記憶についての調査研究のほか、歌を通じた平和学とでも呼ぶべきアプローチを実践的に模索されている。美術作家でもある君島彩子さんは、アジア・太平洋戦争の犠牲者慰霊・平和祈念のための観音像研究を中心に、美術史と宗教史が交差する領域にフィールドワークと文献調査の両方から迫り、第15回(公財)国際宗教研究所賞・奨励賞を受賞されている。

¹ くろさきひろゆき：國學院大學神道文化学部教授

² さとうたけひろ：立教大学コミュニティ福祉学部兼任講師

³ きみしまあやこ：国際日本文化研究センター博士研究員

⁴ にしむらあきら：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授、(公財)国際宗教研究所理事

西村 黒崎さんは、ちょうど豪雨災害があった人吉などにも祭礼の調査で入っておられて、各地の状況の推移を注視されているかと思います。コロナ発生以降の状況について、どう見られていますか。

黒崎 9年前の東日本大震災以降、被災地における宗教や祭りの力、復興、人々の再生を支える役割について現地話を聞き、学生も連れて調査をやってきました。それが2、3月ぐらいから、今年の祭りは無理そうだという声がかつてきました。実際、毎年5月3日に、宮城県女川町の熊野神社の神輿渡御で、震災後には私と学生を含めたボランティアの人たちが70人ぐらい集まって、現地の方と一緒におみこしを担いできたんですけれども、それが3月ぐらいの段階で、これは今年はやらないということになって、中止を余儀なくされました。

他の所も同様に、今年の4月、5月ぐらいから、お祭りはちょっとできないと。ただ神職のみ、あるいはその神職と総代さん数名のみで神事は行うということはあるようです。神輿渡御や、山車を曳くとか、直会とかはなしという形にだんだんなっています。それから、それぞれの神社で、やはり3、4月ぐらいから、手水舎で手水を使ったり、鈴紐をつかんで振ったりということが感染の媒介になるということで、手水舎を使えなくなったり、鈴紐を撤去したりという対応が見られます。また、いわゆるご祈願、祈祷も断ったり、制限したりという対応が広がりました。そういった状況が、今にもつながっているわけです。



黒崎浩行（くろさき・ひろゆき）

國學院大學神道文化学部教授。博士（宗教学）。宗教社会学、情報と宗教、現代社会と神社神道を専門とする。主な著書に『神道文化の現代的役割—地域再生・メディア・災害復興』（弘文堂、2019年）、『震災復興と宗教』（共編著、明石書店、2013年）、『災害支援ハンドブック—宗教者の実践とその協働』（宗教者災害支援連絡会編、春秋社、2016年）などがある。

ただ、それが今後も続くのかという不安もあるようです。災害によってたくさんの方が亡くなったり、避難生活を余儀なくされたり、過疎化がより進行して無事だった人も大都市圏のほうに移住したり、原発事故で住めなくなって広域に避難したりというなかで、せっかく災害から立ち上がり、みんなが結集して現地でお祭りを復活することもあるし、浪江町の請戸^{うけど}の田植踊りのように、避難先で芸能を継承していくという動きがあったりしたのも、今はストップしているような状態です。ある種の宗教や信仰の力が、削がれてしまっているということがあるのかなと思っています。

西村 3.11の前後から、とりわけ震災復興の過程で、都市部だけでなく過疎化した地方も含めて、「無縁社会」といった形で人のつながりへの反省の動きが起こってきて、あらためて祭りや、宗教の信仰生活を通じた人の絆の再構築などを模索してきた状況が、ここに来て、今までと同じ方向だけでは、立ち行かない状況であることがうかがえます。

宗教が人を結びつけることについても注目されていたりしますが、沖縄などで調査されてきた佐藤さんの視点から、今の状況はどう見られていますか。

佐藤 今の質問には、二つのラインでお答えします。宗教のつながりをサポートする意味での芸能、芸術、表現の力についての話が一つ。もう一つは、地域における信仰習俗・生活習俗の中で、祭事、祭礼をどう続けていくのかという話です。

まず地域の話からですが、奄美のほぼ全島で、今年は夏祭りをやめるという決定を5月初めに出しています。島の暮らしを守るために、各字^{あざ}では「今年はしょうがない」とその決定に従い、村人の命を守る選択をしました。このような危機的状況だから中止は仕方がないという判断ですね。これは小さな地域コミュニティが危機に迅速に対応できているという好例です。顔の見える関係の中で、お互いに助け合おうということが言える。都市では、役所や管轄部局からのお願いや告知という形で方

針が決まっていきます。研究者の立場からすると、せっかく祭りの力がそこで発揮されるのに、祭礼をやめるという判断は残念だという思いはありますが、これは外部者の勝手な思いですね。

沖縄本島でもコロナ危機への対応が見られます。お祝いの気持ちを表現する結婚式などでは、規模を縮小するパターンと、丸テーブルを囲んで十分なソーシャルディスタンスを保って座り、お祝いの気持ちを表現するというパターンがあります。伝統宗教行事では、旧暦の3月から4月にかけて、清明祭という中国由来のお墓参りがありますが、県の保健課から、「あまり密にならないように気をつけてほしい」と5つぐらいの項目で指示が出ていました。その項目の第一が、東京・大阪から来る人たちの参加は控えろという指示になっています。先祖を大事にする文化がある中で、親族や亡くなった方々とのネットワークそのものも今年は控えるようにという命令が下ったわけです。しかし、やはり墓参りは大事にしたいということで、墓参りする人たちのニュースが、琉球新報や沖縄タイムスなど地元紙で報じられました。これが、4月の初めの清明祭を巡る動きです。

6月23日の沖縄慰霊の日の話もしましょう。この日は例年と同じく沖縄全戦没者追悼式が開催されましたが、いつもならば2000~3000人単位で式典の会場周辺に人が集まってくるのを、今回は来賓のみに制限し200人弱ぐらいの人数で式典が行われました。首相もオンラインでの参加でした。例年ならば、地元のテレビが夕方のニュースで式典の様子を流します。しかしなんと今年は、新聞社の沖縄タイムスが、若いレポーターを平和の礎に派遣し、参拝の様子を実況中継し、それをYouTubeにアップしています。テレビ局ではなく新聞社がこれをやったということに、大きな意味があると思います。オンラインでも、今までの信仰習俗、あるいは戦没者追悼慰霊の営みやめないというメッセージを、そこに読み取ることができます。

宗教者のオンライン発信

佐藤 もう一つの話、コロナ危機下で宗教者たちがどのようなメッセージを発信し、自分たちがこの状況にどう向き合っていくのかを表現しているということにも触れましょう。もっとも鮮烈な例は、日本の文脈からは離れるかもしれませんが、ダライ・ラマがアルバムをリリースしたというニュースです。

西村 それは知りませんでした。

佐藤 なんとweb上でも、その音声の一部を聴くことができます。ニュージーランドのミュージシャンが、ダライ・ラマを口説き落とし、レコーディングはダライ・ラマの住宅で行ったようです。この時期に、ダライ・ラマが自分のメッセージをメディアに乗せて発信しているということは、意義深いですね。これは以前からあるオンライン伝道や法話という話題に関係しますが、このコロナ危機の中で、世界の宗教的リーダーの一人であるダライ・ラマがアルバムのリリースとしてメッセージを発信したことは、精神文化の大きな動きとして評価できると思います。これを機にダライ・ラマが全世界アルバムリリースツアーをやったら、面白いことになるなとも思います。もちろんそれは宗教的なミッションではあるけれども、ツアー会場では、心と体のレスポンスを促す



佐藤壮広 (さとう・たけひろ)

立教大学コミュニティ福祉学部、明治大学情報コミュニケーション学部ほか非常勤講師。宗教学・人類学。沖縄研究、表現文化研究。共編著『沖縄民俗辞典』（吉川弘文館、2008年）、共著『年表でわかる 現代の社会と宗教』（渡邊直樹責任編集、平凡社、2018年）。ワークショップ「歌う人間学」ファシリテーター。

メッセンジャー、ファシリテーター（促進役）としてのダライ・ラマというキャラクターが立ち上がってくるでしょう。もし自分が彼のブレンだったなら、「いつ、どこに行きますか。ツアーやりましょう」と強く提案します（笑）。

西村 例えばオーケストラの楽団員もそれぞれが自宅からオンラインでつながって、セッションをしたりしていて、社会的制約がある中でそれを越えたつながりの模索が、いろいろな形で試されているようですね。

佐藤 京都、奈良のお坊さんたちが集まって、祈っていますね。

西村 4月24日に7人の宗教者が宗派を超えて東大寺に集まって、共に祈った動きですね。

佐藤 そうそう。ダライ・ラマの動きなども、その一つです。しかしまあ、アルバムリリースのタイミングも、恐ろしいぐらいコロナ危機とシンクロしていましたね。

西村 これが例えば阪神淡路大震災のときなら、ちょうどインターネットが普及し始めた頃ですし、なかなか今回のようなつながり方は、現実化しなかったかなと思います。

君島さんも、沖縄や海外の島にも出かけて戦死者の慰霊・追悼の問題を調査されていますが、そういった視点から、今のコロナ状況について、どう見られているのかを教えてくださいませんか。

君島 私は2月の末に、非常勤講師として沖縄にしばらくいました。同時期、沖縄で初めての感染者が出て混乱していたんですが、そのときは、「6月23日ぐらいには落ち着いていると思うから、6月にまた会いましょう」と言っていたので、「まさかこういう状況が続くとは…」というところです。本来、フィールドワークで行くはずだった場所に全く行

けておらず、東京から地方に行くことがなかなかはばかれるところもあって、仏像などの「モノ」は調査できても、インタビューはまだできていないというのが現状です。

先ほども話題に出たように、東大寺が大仏殿の様子をニコニコ生放送で流し、視聴者数もかなり多かったみたいで世界レベルの話題になっていました。仏教だけではなく、キリスト教の方、新宗教の方、神社の方も参加されていたので、宗教を越えた祈りが新鮮だったみたいです。戦争死者慰霊などを研究していると、宗教、宗派を超えた祈りの場に出会う瞬間は結構あるんですけども、そういったものが、インターネットのニュースを通じて可視化されたというのは、一般の視聴者には逆に新しかったのかなと思いました。

これは本当に偶然なんですけれども、2011年3月10日、ちょうどお水取りの最中だったんですが、現在東大寺別当をされている狭川普文さんにインタビューを行っていたんです。翌日東京に帰ったら、大地震になってしまったのでびっくりしまして、狭川さんに「そちらは大丈夫ですか」とメールに書いたら、震災が発生してすぐに二月堂にいる練行衆の人たちに伝え、地震の被害が収まるように、その地震で亡くなった人たちの供養を祈っているとお返事をいただきました。お水取りの儀礼自体は何百年もずっと変わらないんですけれども、東大寺では、その時代時代で、おそらくすごく迅速にその時の困難の中で求められる祈りを人知れず行っていたのです。それがインターネットを通じて、多くの人に知られるようになったのが2020年だなと思います。

信仰における接触と感染防止

君島 ただネット社会は物足りないところもあって、どうしても情報が「視覚」と「聴覚」に集中してしまうのです。祈りの形は、決してそれだけではないものがたくさんあって、例えば、接触がいろいろな形で重要な意味を持つときもあります。もちろん人と人との接触もありますし、仏像との接触というものもある。善光寺が、おびんずるさま（賓頭盧尊者）

を触れないようにしたというニュースが4月ぐらいにありました。自分の患部と同じところを触ると病気が治るといわれているおびんずるさまの像ですが感染の可能性があるため、触る事を禁止する張り紙が貼られました。仏像を触る信仰は、江戸時代は特に盛んでしたが、近代以降になると、触れなくなることで視覚的意味が強調されるようになりました。博物館などでは、もちろん仏像を触るのは今も駄目ですけども、接触が禁止されると視覚的に仏像を鑑賞する事に、さらに重きが置かれるようになりそうですね。でも実は大正期にはおびんずるさまを触ると伝染病の可能性があるという話が出て触ることが禁止された地域もあったのです。結局、今の時代になってもなくなってないということは、もしかしてコロナが落ち着いたら、元に戻るのかもしれませんが。

西村 ありがとうございます。今は博物館などでは、むしろ触れるように、3Dプリンターで複製したりもしますが、特に近代においては触れない、観賞をするだけの対象として、見ることに特化していたわけですね。

黒崎 今の話は、感染者の臨終に際して、遺族が看取りをできなかったというところにつながる問題です。確か最初、ローマ教皇は、聖職者に対して、病気になった人に会いに行く勇気を持ってというメッセージを発信しましたが、それで70人近くの神父さんが亡くなってしまったということがありました¹⁾。それでまた、非難を浴びることもあったようです。ただ、その罪とか穢れというものに対して、宗教はやはり浄化したり踏み越えたりということに、力があつたと思うんです。それが今、こういった感染症の科学的な知識がもたらされているなかで、どう対応したらいいのか。WHO（世界保健機構）が4月7日に世界の宗教指導者や組織に対し、コロナ対応についての中間ガイダンスを発表していますが²⁾、科学的な知識を踏まえた上で、むしろ宗教的なリーダーは、人々に影響力があるのだから感染防止に役割を果たしてもらいたい、と発信していたんです。それからもちろん、心のケアの役割といったものもあ

るんだと発信していましたがけれども。今の感染症の知識を踏まえつつも、その穢れとか差別とか、感染症によって生みだされてくるものに対して、どう宗教者として対峙するののかということの一つが問われているのかなと思います。

佐藤 WHOの発令は、実はとても大きな意味があると思います。黒崎さんがご指摘のように、従来ならば、保健か信仰か、公衆衛生か信仰かという二者択一で事態を捉えるところを、世界の保健機関が、宗教も基本的態度としてはサイエンスや疫学的なエビデンスを踏まえて振る舞いましょうと言った。これはとても大きなことですね。

オンライン発信を補完する宗教の底力

西村 先ほど佐藤さんから、ダライ・ラマの興味深いアルバム発表の話がありましたが、オンラインでの宗教的なメッセージの発信の可能性とか、こういうスタンスの自粛の中で、オンラインだからできる可能性を模索しようという動きが、いくつかあったんじゃないかなと思うんですけれども。佐藤さんが見聞きされた中で、この間注目されていることはありますか。

佐藤 君島さんもおっしゃっていましたが、視覚優位の世界の中に、どうやって宗教の行、行為ぎょうというものを入れ込んでいくのかの実験は、すでにあると思います。アメリカ合衆国の例でいうと、テレ・エバンジェリスト（テレビ伝道師）です。彼らはここ30～40年ずっと、オンラインでミッションを行ってきました。その後のフォローアップをどうするのかについての知恵もまた、獲得してきたと思うんです。そのフォローアップという課題が、今や全教団の共通課題になったという見方も可能です。こうした課題にいち早く対応していく教団がどこなのかという点も、宗教学・宗教社会学な探究ポイントですね。

もう一つ、立教大学でキリスト教を勉強した時間が長かった僕の宗教

学的な観点からすると、コロナ危機下での基督教の強みというのは、例えオンラインになっても、「私たちはこれを読めば大丈夫！」というテキストがどっこい手元にあるという点です。教典が読み物として受け継がれている教団と、集まることを通したなかでミッションをつないできたある意味でインティメート（親密）な教団との分かれ目というのが、このポスト・コロナのオンラインミッションのなかで出てくるのではないのでしょうか。教典とシンプルな行を備えている教団は、おそらくポスト・コロナでも共同体としてのレジリエンスを発揮して何とか生きていけるだろう。そのように予想できます。

西村 オンラインというのは、特に若者に親和性が高いですね。私も今回、オンライン授業で慣れないZoomを試行錯誤して使いましたが、私よりも圧倒的に大学1年生の息子のほうが、デジタルデバイスに対して強いんですね。40代の私でさえそうなのだから、例えば、日常お寺や教会に通っていた高齢者であったり、これから儀礼やテキストになじんでいく若い世代が、いきなりこのオンライン状況に投げ込まれたときに、いろいろと戸惑いもあるんじゃないかと思います。佐藤さんのお話をうかがっていて思ったのが、テキストとか、そうした単純な儀礼とかを持っているということ言うと、家庭の中でそれが共有されているということも大きいわけですね。今ではそうした家庭での信仰生活は少数になってきているのかもしれませんが、そうしたベースを共有できていれば、別の情報はオンラインに強い世代が担当して、身近なところで共有することもできるはずですが。

佐藤 そうだと思います。今までオンラインが軽視されてきた分、オンラインのスキルアップが必要になってきていると思います。だから、それをどこの教団が最初にやるかに注目しています。「Zoomで〇〇教」や「Google Meetで礼拝」なども、すでに実践例があると思います。

また、君島さんがやっぴらっしやる、にぎり仏のワークショップ。これも、ご家庭で準備するレシピを先にPDFで配っておいて、「じゃあ

いきますよ、まずはこれで」というように、オンラインでもできると思います。そうすると、自分の手元にはこんなものができましたと最後に提示できれば、疑似的な参加意識やありがたさが生まれる。もちろん、魂込めまでは難しいのですが、それでもオンラインでやれることは結構あると思います。いかがですか。

君島 オンラインで仏像を作るというのは、正直考えていなかったです。でも、そういうのも面白いかなと思います。ただやはり、インターネットを使わない世代にどうやって手を伸ばしていくかが、すごく課題かなと感じます。例えば、一緒ににぎり仏をやっている、ホームレスの方や生活困窮者の方などの支援をしている「ひとさじの会」(浄土宗僧侶を中心とする社会慈善団体)では、ボランティア活動ができなくなった間も、マスクを着けて、そういった方たちの所に支援物資を配ったりされていました。そういった活動のなかで、生活に困窮されている方達と一緒に仏像などを作ると、市民講座とはまた違うところがあって、生の祈りというか、^{なま}生の気持ちのようなものが込められていると感じます。そういった現場を見ていると、なかなか全てがオンラインにできるのかなという不安もあります。



君島彩子(きみしま・あやこ)

国際日本文化研究センター博士研究員。博士(学術)。仏像を中心とする物質宗教論、宗教美術史を専門とする。主要論文「祈りから継承へ、平和モニュメントの役割の変容—広島平和記念公園、旧中島本町のモニュメントをめぐる」(『次世代人文社会研究』13号、2017年)「平和モニュメントと観音像—長崎市平和公園内の彫像における信仰と形象」(『宗教と社会』24号、2018年)、「現代のマリア観音と戦争死者慰霊」(中外日報社、第15回涙骨賞、2019年)など。

アマビエの流行現象

君島 若者のほうがオンラインに強いというのは、もちろんそうなんですけれども、「分かりやすさ」のほうに、どんどん流れる傾向があります。アマビエのように非常に分かりやすいキャラクターだけが文脈を無視してどんどん独り歩きしていつて。そのキャラクターの分かりやすさが故に、一度周知されたら今度は商業的に広がっていく。しまいには厚生労働省まで使い出してしまったところを考えると、その分かりやすさというものは非常に危ういとも考えています。今はアマビエは流行っていますけれども、おそらくもう3、4年ぐらいたらきっと、そんなものもあったねと忘れられてしまうということもありそうです。アマビエを使った御朱印を作っている神社とか、すでに結構出てきていますが…

佐藤 早速ね。

君島 電通が商標登録するという話もありましたけど、宗教界が安易に、そういう分かりやすく新しく出てきた文脈に乗ってしまうのは、タピオカが流行ったらタピオカを売りましたという感覚と、ちょっと近いような気がしていて、やはりもともとあった宗教的な文脈の方をメディアでも重視した方がいいのかなと感じています。アマビエに関しては、楽しさや可愛らさを感じると同時に、インターネットの拡散力の危うさも感じました。漫画家さんなどは、結構楽しんで絵を描いていらっしやっただけでも、現代美術のアーティスト達は冷淡な方が多かった印象です。やはり美術を自己表現として社会に発信しているアーティストにとって、そのムーブメントに乗ってしまっているのかという躊躇はあったと思います。

西村 いわゆる「インスタ映え」のような感じで、表面的な流行に乗る危うさですね。歴史的に見ると流行り^{はやりがみ}神現象とも通じるところもありそ

うですが。

佐藤 アマビエの話で補足的な話をすれば、香川雅信さんが書いた『江戸の妖怪革命』（河出書房新社）という本がありまして。もやもやした有象無象の妖怪たちがキャラクター化されたのが、江戸の中期から後期にかけてで、そのなかでいろいろなキャラクターが立ったときに、文脈から切り離されて、江戸妖怪図鑑とかで図像化されることで脱文脈化する。それによって、妖怪たちが全国的に広がるという現象が起こったとする分析を、香川さんが民俗学の分野から行なっています。現在、「私のアマビエイラスト」みたいに、オンラインでアップ合戦をやっているのも、文化現象として見るとすごいことが起こっているなと思います。なぜそれだけアマビエに集中できるのか。これは、80年代以降に顕著に見られる、キャラクター化することで問題を把握したり、単純化して分かりやすくするということなんだと思います。この動きには、正解も不正解もないのですが、図像やキャラクターの威力は大きいですね。コロナ危機下でも、このような動きが繰り返されているなあとあらためて思います。また、電通がそこに商機を探しにいったというのは、非常に分かりやすい話でもあります（笑）。

君島 東北に行ったら、アマビエこけしというのが、お土産として売っていて。

佐藤 買ってきましたか？

君島 いや、3000円だったので、ちょっとやめたんですが。買ってくればよかったですか。でも、やはりそういうのは、これからどんどん出てくるんだろうと思います。

不安の蔓延とコロナ大仏

西村 今の佐藤さんの話をもう少し広げて言うと、不安であったり、もやもやしたことを、どう飼いならせるかということですね。自分たちの向き合える形に持っていくことで、何とか不安を抑え、鎮めようというところもあるかなと思います。

それとはまた違うのかもしれませんが、先日、「コロナ大仏」という動きがあるとネットで見つけました。君島さんは発案者の方と座談会をやっていましたよね。その件について少し教えていただけますか。

君島 発案者の風間天心さんは、アーティストで曹洞宗の僧侶の方です。風間さんと私は、結構古くからの知り合いで、10年以上前に一緒に展覧会に出展したこともあります。そのときはお互いただのアーティストで、10年経って、去年久々に再会したら、彼は僧侶になっていて、私は宗教研究者になっていたという。そういうご縁もあって、先日、インターネットの番組で、コロナ大仏について議論を交わしました。コロナ大仏のプロジェクトを風間さんを中心に仲間のアーティストで立ち上げ、クラウドファンディングででお金を集めており、実際に300万円以上が集まっていました。まず大仏を建立する前に、大仏勧進のため全国をキャラバンで回る費用を募りました。

勧進キャラバンは、風間さん達がキャンピングカーに大仏の胎内仏となる像をのせて、全国各地の協力寺院や団体を回り、法要を行っています。法要では参列者が願いを紙に書き胎内仏に貼っていき、胎内仏はだんだん大きくなっています。願いを書いた紙以外に、中止になった演劇の公演、コンサート、展覧会などのチラシや、お店が時間短縮営業したり臨時休業したりした案内などの紙も貼られました。風間さんはこのような新型コロナウイルスのせいでできなくなった「こと」を、勧進キャラバンの中で供養するパフォーマンスを行っているのです。彼は、アーティストであり僧侶として、いろいろな供養をパフォーマンスアートにしてきました。例えば平成が終わったときに、平成という時代を供養す

るパフォーマンスをしています。これは宗教儀礼であり、アート活動でもあります。供養するということは、死者供養でもそうなんですけれども、記憶をとどめるということでもあるので、その供養するパフォーマンスによって、そのことを記憶にとどめていきましょうということなんです。コロナウイルスで亡くなった方もいらっしゃる、そういった方の供養もありますが、コロナウイルスの影響によって、経済的にいろんな被害を受けた人たちのほうが圧倒的に多いと思います。様々な地域で多くの人々に会い、法要を続けることがコロナ大仏においては重要な意味をもつのです。現在は勧進がメインの活動になっているので、コロナ大仏の建立場所も尊格もまだ決まっていないそうです。

「コロナ大仏」という、ポップな響きだけが独り歩きしていて、批判の声も多くありました。しかし彼と討論していく中で、供養によって記憶するというのがすごく大事だと感じました。今まさに経済的に困窮している人たちというのは、コロナのせいで失われてしまったものたちの記憶をどうとどめるかということまでは考える余裕はないと思うのです。風間さんはアーティストとして、僧侶として、供養という儀礼の形を通して記憶していく。最終的に大仏という形のモニュメントとして、その記憶を全て何らかの形で残していくというのが、アートパフォーマンスとしても、宗教儀礼としても意味あるものではないかなというふう

に、私は感じました。

西村 すごく壮大なプロジェクトですね。例えば奈良の大仏でも、聖武天皇の為政者としての思いもあるし、一方で行基などが、いろいろ勧進して回ったわけですね。それもやはりその時代の不安であったり、そうした形で、人々の力を結集する。鎌倉時代に焼き打ちされて、東大寺を再興しなきゃいけないとなったときに、重源がまた勧進をして回ったときもあると。恐らく、重源とか行基の思いもそうだし、人々がそこで力を合わせるといふところにも、現代の人々の、不安をどう乗り越えていくかということに、時代は違ってもつながっていきそうだなと思いつながりながら聞いていました。

オンライン空間における救済活動

西村 いろいろな話題について語っていただきましたが、今後のことも含めて、最後に何かありますか。

黒崎 一つは、祭りはできないけれど神事はやっているということで、それぞれの宗教において、やはり本質は何かということを開き直すようになっていのではないかと思います。それは、7月の水害においても、現地に行ってボランティアをするという動きができないなかで、遠くにおいて宗教者に何ができるか。やはり祈りじゃないかというようなことを反省させられるというメッセージを、宗教者の方が Facebook に書いていたりします。

それと、オンラインでの傾聴活動という話題に関して、20年ぐらい前、私はインターネットと宗教のことについて研究していました。そのときに、金光教の尼崎教会の若先生といわれている教会長さんにインタビューしたことがありました。これについては川端亮先生と兼子一先生が、『新世紀の宗教』（創元社）という宗教社会学の会の論集の中に書いていらっしゃいます。その方はすごく悩んだ時期があって、それで自殺しようと思った時期もある一方、自分は教会長の後継者であるので、どこで自分が力を発揮できるかということ考えたときに、ネットの掲示板に、いろいろな人が悩み相談を書いているのを見つけた。金光教の教会というのは、金光教用語で「くぼい所」というんですけれど、くぼい所に広前を建てて、そこでお取次³⁾をするというのが自分たちの役割なんだと。だとすると、今インターネットこそがその、くぼい所なんじゃないかと考えて。それで最初は Yahoo! 掲示板で悩み相談に乗ったのを、後に自分で掲示板を作って、そこでずっと書き込みやメールがやってくるのに対して応答するという取り組みをはじめていったと、そういう経緯のお話をうかがったことがあったんです。

その当時、仏教の僧侶の方でも、SNS とかネットの掲示板などで、自死念慮者の方の相談に乗っていたりとか。それから DV とか、そう

いった、いわゆるリアル世界で本当に苦しい状況にある人たちが、何とか救いを求めて、あるいは何かそのヒントを得られないかということでネットにアクセスしているという状況があつて。そこに宗教者が関わっていったということが、当時、いろいろな所で見られていたんです。

今回のコロナの場合は、臨床宗教師の方の動きとして、「感染症と闘う医療従事者の話を聴く会」⁴⁾というのがスタートしているようです。それに先行するような取り組みは、おそらくインターネットがこの30年ぐらいの間に出てきたなかで、オンライン相談とか、オンライン傾聴という言い方はあまりしないかもしれませんが、そういった形、あるいはオンライン自助グループという形で進んできたところがあります。そこの役割、そこでのまた宗教者の関わり方というのを、もう一回見つけ直すきっかけになるのかなと思いました。

マスク地蔵のヴァリエーション

西村 ありがとうございます。では、君島さん、どうですか。



写真右上：西村 明（にしむら・あきら）
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授、
（公財）国際宗教研究所理事。

Zoom での鼎談の様子

君島 そうですね。もし時間があつたらお話ししようかなと思っていたのですが、最近ずっと、マスク地蔵などマスクをつけた仏像の記事を集めています。感染症の予防で、マスクを着けるということが新しい生活様式になってしまいましたよね。その中で、仏像にマスクを着けるという動きが、日本だけではなくタイなどでも起きていて。彼らはなぜ仏像にマスクを着けるかを、いろいろ調べていました。信徒さんが着ける場合と宗教者が着ける場合と両方ありますが、その理由は主に三つあります。一つは、感染症予防のために、マスクを着けましょうという啓蒙として。観音様もマスクを着けているから、皆さんもマスクを着けましょうねという宣伝として。もう一つは、『かさこ地蔵』的な、お地蔵様がマスクをしていなくてかわいそうだから、着けてあげましたと。主に信徒さんが着けてくださいとあって、赤いマスクを着けてよだれかけとコーディネートしているパターンが結構あります。最後に、最近だんだん増えてきたのが、マスクを地蔵に着けることで疫病が早く収まるようにという、疫病退散祈願。実際に、マスクに疫病退散と筆書きしたりしているものとかがでてきて。これがわずか3カ月の間にどんどん信仰の形が変わっているというのが、今とても気になっているところです。

やはりマスクを着けている仏像というのは写真映えするので、地域ニュースなどかなりいろいろな所で報道されていました。本来、仏様はマスクを着けなくても感染しないはずだけれども、やはり分かりやすい記号のようなもののひとつとして、マスクというのが出てきたのかなと。私は美術系の人間なので、視覚的なところが、一番分かりやすい時代になってきたんだろうなということが、どうしても気になってしまいます。仏像にマスクを着け続けられるのかについては、世界規模でその情報を収集していきたいなと考えています。

西村 ありがとうございます。佐藤さん、どうでしょう。

佐藤 今の話、めちゃめちゃ面白いですね。渋谷ネタでなんですけど、3月の下旬だったでしょうか、ハチ公にマスクが着けられていました。そ

のときはハチ公も感染予防という話だったのですが、5月の新聞記事見ると今度は「祈願」に変わっているんです。マスクを通したポスト・コロナの意識変化みたいなものが起こっているとも考えられますね。そこに、仏像とか、フィギュアが介在しているというのは、やはり古くて新しい形なのだなと、あらためて思います。モナリザにもマスクとか、図像をいじるといった文化は、マスクネタですぐにFacebook、SNSでたくさん出てきています。でも、実際の仏像にマスクをとというごきは、非常に興味深い。

白いマスクとか黒いマスクとか、マスクにもいろいろなデザインがあるというのも、ちょっとした自己提示の表れです。だから、自前のマスクをデザインして作りましたという宗教教団が出てきたら、非常に興味深いと思います。

君島 タイではあります。タイでは、もうお寺でマスクを生産し、祈願もしているところがあります。

佐藤 ありがたいマスクということですよ。

君島 ありがたいマスクですし、あとは使う布も廃プラスチックをリサイクルして、環境にも配慮しているという英語の記事がありました。仁和寺ではマスクを出していましたが、本当に予防じゃなくて意識的なマスクでした。まだそのタイの事例のように、本当に医療マスクとして使えるもので、かつ仏像などが印刷されているようなものは、私が調べた限りではまだ出てきていないですね。

複合危機と宗教・信仰の可能性

佐藤 70年代、複合汚染ということが問題になりました。環境汚染は環境だけの問題ではなく、汚染そのものが社会問題化したり、教育とか地域コミュニティを破壊するというような複合的な危機だということ

で、非常に話題になりました。ポスト・コロナの信仰の形を考えるたびに、このコロナウイルス感染の拡大を複合的な危機として捉える視点が必要だと強く思います。

経営コンサルタントの富山和彦が、『コロナショック・サバイバル』（文藝春秋）という本を出しています。富山がそこで指摘しているのは、このコロナショックというのは複合危機だと認識すべきだということです。この本では、コロナ危機下でよく指摘されることが列挙されています。今起こっているのは、産業崩壊、金融崩壊、雇用崩壊、経済崩壊、医療崩壊などだと。富山はそこに宗教崩壊という言葉は入れないわけです。これが実は、われわれ宗教研究者にとってのヒントであり、あるいは可能性だと考えられます。宗教崩壊という言葉がまだ聞こえてないとしたら、宗教はこの状況の中で、何とかレジリエンスを保とうとしている一つの現場だと考えることができるわけです。人間関係の危機、そして人間と神仏神霊との関係の危機が、目下の複合危機のなかで生じている共通の危機だとすれば、分断とか排除とか差別などに抗し、何とかそこをつないでいくシステムとしての宗教や信仰の世界が機能する兆しが、現在どこに見られるのか。ローカルもグローバルも含めて、教団の信仰や地域の祭祀のあり方と、その強みと課題を捉えていく必要がありますね。今回、コロナショックを体験しながら、あらためてそのように思った次第です。

西村 もう今ので全体のまとめになったかと思えるお話でした。やはり宗教というのは、危機だからこそ発動してくる部分があるんだと。あるいは先ほどのアマビエもそうですが、危機的な状況だからこそ、何か、その不安を何とか解消して乗り越えたいということで、人々が伝統の中に共有されている知恵を、何とかくみ上げたいというところがありそうです。9年前の東日本大震災であったり、あるいはそれぞれ時代のターニングポイントになるような出来事のなかで、宗教界は、新たに自分たち自身もいわば脱皮をしながら、今までの形のままではなかなか対応できないところで、その殻を破って、どう新しい状況のなかに、その危

機に対応していくかということが問われてきたのだらうと思います。恐らく今が、そうした脱皮が再び求められている状況なんだと、今の佐藤さんのお話を聞きながら感じました。

今回はオンラインでしたが、お集まりいただき、非常に貴重な情報も含めて、幅広いお話をうかがうことができました。ありがとうございました。

注

- 1) 「新型コロナで聖職者 67 人死亡、職務続ける司祭の姿も イタリア」(AFPBB NEWS、Yahoo! JAPAN ニュース 2020 年 3 月 26 日) <https://news.yahoo.co.jp/articles/2a6f71be95adb75492dd78bec4f693ebda01df22>
- 2) <https://www.who.int/publications/i/item/practical-considerations-and-recommendations-for-religious-leaders-and-faith-based-communities-in-the-context-of-covid-19>
- 3) 人の願いを神に、神の思いを人に伝える救済の業 (『縮刷版』新宗教事典・本文篇』1994 年 = 2001 年、弘文堂)
- 4) <https://careforcovidfighte.wixsite.com/caremedical>